

婦人と子ども

第十八卷
第十號

大正七年十月一日發行

幼兒と齒

青木醇一

御承知の通り、齒は小兒が生れて凡そ七、八ヶ月位の頃から生え初めまして、滿二年位の間に、

ほぼ出揃ひます。此の時は上顎と下顎とを合せて二十本でありまして、之を乳齒と名づけて居ります。此の乳齒は、小兒が六、七歳になりますと、追々と後から出て来る新しい齒と抜け換ります。此の抜けかはりましたものは、大人になつても其儘残つて居りますので、之を永久齒と稱へ、全體では三十二本になります。

斯様な譯で、四、五歳の幼兒では、齒は大人と違ひまして、數もすくなし、又小さくて、弱いのであります。これが幼兒に咀嚼しにくい食物や堅

いものなどを與へてならない一つの理由となるのであります。

齒は消化器官の内、第一の入口にあるもので食物をよく咀嚼して、之を細かにし、而してそれを唾液とよく混ぜ合せて、胃の方へ送り、胃腸での消化を容易にする役目を持つて居るのであります。食物がよくかみくだかれてありますと、胃に入つてからも、胃液の作用がよくなる譯であります。之に反して食物をよく咀嚼しないで丸呑みにすると、それ丈胃腸の負擔が多くなるのみならず消化も充分に出来なくなりませす。斯様な事が永くつづきますと、胃腸は追々と害され、從て消化作

用は益々悪くなり、遂には身體の營養にも障礙を及ぼして參ります。

でありますから、齒は消化器官として、胃腸と同様に大切なものであります。従つて平生其の攝生を守り齒の健康を保つ様にせねばなりません。然るに齒の保護と云ふ事は、一體に人々から閑却されて居ります。齒磨を使ふとか、口腔を清潔にするとか云ふ様な事は漸く青年期位になつて初めて行はれるのであります。そして幼兒なり、兒童なりに於きましては、殆んど顧みられない有様であります。幼兒などの齒を丁寧に検査して見ましたならば、完全な齒を具へて居る子供は、意外に少いのであります。大抵は齲齒を持つて居るとか一本なり、二本なり缺けて居ると云ふ有様です。これはすべてが齒の不攝生にのみよると云ふ譯ではありませんが、齒の養生如何と云ふ事が大きな原因をなして居る事は争はれない事實であります。そこで、私は齒の養生と云ふ事は、子供が大

きくなつてから、初めてすると云ふのでなしに、既に幼兒期から心懸けて頂き度いと云ふのです。

○齲齒の原因

齲齒が如何にしておこるか云ふ事をお話する前に、一應齒の構造をごく簡単に説明いたす必要があります。齒は、表面は、珥瑯費と申しまして極めて堅牢な物質から出來て居ります。其の内部を齒骨質と稱へて、之は骨質から出來て居ります。其の中心は、柔軟なる組織から出來て居りまして、此の中に澤山の血管や神經が來て居ります。そしてそれからごく細い神經纖維が齒骨質まで達して居るのであります。冷たいものや酸いものに對して齒が浮く様に感ずるのは之が爲めであります。

此の珥瑯質や齒骨質は化學的には主として磷酸石灰、碳酸石灰及び「マグネシウム」鹽等より成つて居るのですが、之等の石灰鹽は酸に合ふと、次

第に溶ける傾向を持つて居るのであります。例へば茲に光澤のある珐瑯質を持つた健康な歯を取つて來まして之を酸性の液體の中に入れておきますと、二三日後には其の美しい光澤を失つて、其の表面は汚くなり、白い班點を生ずる様になります。之を永くおきますと、追々に石灰分は溶解されて遂には此の堅い歯が柔軟なる軟骨様のものに變ります。次にこの軟骨様物質の薄片を取りまして之を酸性でない液體例へば唾液でもつけて、空中にさらしておきます。すると次第に腐敗して參りまして、終には不愉快な惡臭を放つ様になります。口腔内に於きまして、略ぼ、之と同様の作用が起るのであります。私共の口腔内には、いつも多少の食物の残渣があります。殊に口腔を清潔に致しておかない人では、齒と齒の間などに、澤山残つて居る譯であります。是等のものが、口腔内で酸性醱酵を起すのであります。つまり吾々が食べた澱粉質なり、糖分なりと云ふ含水炭素が、口

腔内に居る微菌の作用で分解されて乳酸醱酵を起し、斯くて乳酸が出来るのであります。この乳酸が齒に對して害になるのであります。即其永い間の作用で、珐瑯質や齒骨質が追々と崩壞されてゆきます。そこへ食物の残渣の蛋白質類が腐敗醱酵を起すので、其齒は侵蝕されるのであります。

斯様な工合にして、齶齒は出来るのであります。が、殊に平素極く冷いものや、熱いものを飲むとか又は堅いものを無理に噛む等の事で、珐瑯質に細裂ひびが出来ると、是等の作用は一層容易に行はれるのであります。細裂と申しましても、勿論吾々の肉眼では見えない程の小さなものが出来るのです。

斯様にして、齒の珐瑯質、齒骨質まで、腐蝕されると、神經や血管の澤山來て居る齒髓が外にあらはれる様になります。従つて食片などが直接齒の神經にふれるので齒痛を覺えると云ふ様になつて來るのであります。尙進んでは齒髓までも敗壞

し、更にそこより、色々の黴菌が顎骨の内部にも達し、そこに病氣を起すと云ふ様な危険もあります。是等の危険の外、前にも申述べた通り、齲齒がありますと、食物の咀嚼が不充分になり、消化を妨げ、胃をわるくし、自然身體の營養にも及ぼす譯でありますから、齒の健康を保つと云ふ事は大層必要な事になるのであります。

○齒の攝生

之には第一に、口腔内を清潔にして置く事が大切であります。そして齒と齒との間に食物の残渣の残つて居ない様にいたします。そうすれば、自然、乳酸醱酵と云ふ様な事も少くなりますし、又蛋白質が分解して、腐敗作用を起す事も少くなりますから、齒を傷ふ事が少くなるのみならず、口内が臭くて、周圍の人に不快の感を與へると云ふ様な事もなくなります。

それには含嗽をすると云ふ事が肝心であります。

す。成長した子供ならば、含嗽も獨りで出來ますし、楊子を用ひて、齒を磨く事も出來ますが、四、五歳にもなります幼児では、之が六ヶ敷いのであります。しかし含嗽位なれば、教へれば追々とうやう出来る様になりますから、食後には、必ずよく含嗽をさせると云ふ様にいたし度いと思ひます。

次に余り冷いもの、熱すぎる食物等を可成避ける事があります。是等が屢ば珐瑯質に細裂ひびを作る原因となるからであります。同様に堅いものを無暗に噛みくだくと云ふ事も避けねばなりません。健康な齒の發生と齒並みをよくする爲めには營養を適當にする必要があります。骨及齒の構成にはそれだけの石灰分が必要です。従つて乳兒が一年前後になりまして乳齒の生える頃には、母乳以外他の陪食料を漸次加へて行く事は、此の點に於ても必要の事でありませぬ。又其の頃より、齒を適當に使ふ事、即ち食物をよく咀嚼する習慣を

つける事が大切であります。咀嚼運動によつて、顎骨及び歯牙への血液循環はよくなるのであります。従つて營養もよくなり、顎骨もよく發達して參ります。顎骨が適當に發育して居りませんと、乳齒が後になつて、それよりも形の大きい永久齒に抜け換る時に永久齒が奇麗に齒並みを揃へる事が出来ません。と云ふのは顎骨に永久齒が正しく列をなして並ぶ丈の余地がないと、或る齒は前に或る齒は後ろにと云ふ様に、齒並みに凹凸を生じて參ります。齒列が正しく揃はないと、人間は健康に見えません。そして醜いのみならず、丁寧に齒の掃除をしましても、齒と齒との間に食物の残渣が残り易くなり、従つて齲齒なども出来易くなります。

○乳齒保護の必要

乳齒は小兒が六七年後になりますと、追々と抜け落ちて、永久齒に換ります事は前申した通りで

あります、従つて乳齒はそれ程大切にせんでもよからうと考へる人があります。これは大變な誤りであります。乳齒は是非永久齒に代る迄丈夫に保存しておかねばなりません。それは單に幼兒期によく咀嚼の出来る爲めと云ふだけではありません。乳齒が齲齒になつて、早く落ちますと、顎骨の其の部分の發育は、停滞いたします。そして永久齒がそこへ生える場合、充分の場所がない爲めに、或は斜に發育し、或は前に、或は後ろにと云ふ工合に、齒の位置が自然悪くなります。或は又乳齒の齒根などが炎症に陥つて居る場合、丁度その後ろへと生えてくる若い永久齒が、同時に犯されると云ふ様な事もないとは限りません。そこで乳齒は永久齒と同様に其の保護が必要な譯であります。

尙こゝに一つ申し上げて置き度い事は、よく世間では幼兒が砂糖(菓子類)を澤山食べると、齲齒になると申しますが、これは何も砂糖を食べた爲

めに、齶齒になるのではありません。勿論砂糖は口腔内で分解して、乳酸酸酵を起しますが、これは澱粉質のものでも、同様であります。私共の毎日食べて居る米なり、野菜なりでも意味は同じであります。要は口腔を清潔にして置く事でありませぬ。お菓子を食べたところで、食後によく口を水でそ、ぎまして、其の残渣のない様にして置きさへすれば、自然糖分が乳酸酸酵をおこして歯を傷ふやうな事もなくなる譯であります。つまり何でも食べたものが口腔内に残留してゐると、それが分解して、乳酸酸酵を起し、乳酸が生じ、この乳酸が、齒の珥瑯質や齒骨質を崩壊せしめ、遂に其齒は侵蝕されることになるのであります。この時はもう立派な齶齒なのであります。それ故に吾々は食後の含嗽といふことを兎々も忘れてはなりません。殊に幼児には何か食べたら必ずうがひをするといふ習慣を早くから附けるやうにしたいと思ひます。

○古人虫十句

| | |
|----------------|----|
| 盆過て響聞くらし虫の聲 | 芭蕉 |
| 虫よ虫啼て因果か晝ながら | 乙州 |
| 雨さむく草にしつむや虫の聲 | 怒風 |
| 虫ともの哀をつくす夜中かな | 勺空 |
| 猶あはれ撰のこされし出のこゑ | 貞寶 |
| 行水の捨所なし虫の聲 | 鬼貫 |
| 虫の音の中に咳出る寢覺がな | 丈草 |
| むしの音や關宿船の鹿朶の中 | 養浩 |
| 虫かりやむさし野に手の置所 | 鳥醉 |
| ぬけからと並んで死る秋の蟬 | 丈草 |